

JINS が「杉本博司 絶滅写真」展示作品 《CAMERA MAN》へ制作協力

東京国立近代美術館にて6月16日（火）より展示開始

株式会社ジズ（以下 JINS）は、2026年6月16日（火）から9月13日（日）まで東京国立近代美術館にて開催される「杉本博司 絶滅写真」の展示作品《CAMERA MAN》に、光学機器メーカーである株式会社シグマ（Sigma）と共同で制作協力を行いました。



《CAMERA MAN》2026 Photo : Masatomo Moriyama（森山雅智）

カメラを人間の目の構造を映した装置として捉えた杉本氏の《CAMERA MAN》

本展では、さまざまな領域で活動する現代美術作家、杉本博司氏の芸術の原点である銀塩写真の初期から現在に至る銀塩写真約60点を展示。確たるコンセプトに基づく、独自の表現による作品は、銀塩写真の技術としても頂点を極めるものであり、写真がデジタルに置き換わった今、その技法はまさに「絶滅が危惧される」ものと言えます。

本展示作品の一つとなる《CAMERA MAN》は、「カメラは人間の目の構造を映した装置である」という杉本博司氏の構想のもと開発されました。シャッター速度1秒のメガネ型カメラのシャッターを自身の手で切ることにより、3分間の間の後、露光される1秒の外景が網膜（記憶というフィルム）上に露光・保存される仕組みとなっています。JINSがアイウェアブランドとして培ってきた技術やデザイン力と、Sigmaの光学製品のものづくりと高度な加工技術を融合させることで、人間の目にシャッターを組み込むかのような「人間写真機」を具現化しました。

杉本博司氏による《CAMERA MAN》作品コンセプト

カメラは人間の眼の構造を映した装置である。レンズは水晶体、絞りは瞳、フィルムが網膜である。しかし困ったことにシャッターは人間の目には据え付けられていない。そこで人の目にシャッターを組み込み人間写真機を構想した。シャッター速度は1秒とし、シャッターレリーズを通して自身の手でシャッターを切る。その前に3分間を闇の中で過ごす。その後一瞬、1秒の外景が網膜上に露光される。外景は網膜上に浮かび記憶というフィルムに保存されるが、画像の劣化は個人差にもよるが一般的にかなり早い。メタファーとして1秒を人の一生に例えてみた。人の平均寿命を85年とすると、この3分は1万5千年程の時の流れになる。人類が意識を持ち文明化へと進んだ時間とほぼ一致する。文明の時間の長さを、人の一生に例えて実感してもらう為の装置として考案した。

展覧会概要

- 【展覧会名】「杉本博司 絶滅写真」(HIROSHI SUGIMOTO: EXTINCTION)
- 【会期】2026年6月16日(火)～9月13日(日)
- 【開館時間】午前10時～午後5時(金曜・土曜は午後8時まで)
- 【休館日】月曜日(7月20日を除く)、7月21日(火)
- 【会場】東京国立近代美術館 1F 企画展ギャラリー
- 【展覧会公式サイト】<https://art.nikkei.com/sugimoto/>

杉本博司氏プロフィール

1948年生まれ。1970年渡米後、1974年よりニューヨークと日本を行き来しながら制作を続ける。初期代表作に〈ジオラマ〉〈海景〉〈劇場〉シリーズがある。2008年に建築設計事務所「新素材研究所」、2009年に公益財団法人小田原文化財団を設立。2017年には構想から10年をかけて建設された文化施設「小田原文化財団江之浦測候所」を開設。演出と空間を手掛けた『At the Hawk's Well / 鷹の井戸』が2019年秋にパリ・オペラ座にて上演。

著書に『苔のむすまで』『現な像』『アートの起源』『江之浦奇譚』『影老日記』などがある。2001年ハッセルブラッド国際写真賞、2009年高松宮殿下記念世界文化賞(絵画部門)受賞、2010年秋の紫綬褒章受章、2013年フランス芸術文化勲章オフィシエ叙勲。2017年文化功労者に選出、2023年日本芸術院会員に就任。

Sigma について

"The Art of engineering. Engineering for Art."
芸術の域まで技術を高め、技術を芸術に尽くす

Sigmaは、カメラ、レンズ、アクセサリーの製造販売を行う日本の光学機器メーカーです。1961年の創業以来、人々が持つ表現への情熱に対する深い敬意を常に忘れず、あらゆるニーズに応える最高の撮影道具の提供を目指してきました。Sigma唯一の生産拠点である会津工場、そして東北地方を中心としたサプライチェーンによって実現する「Made in Aizu, Japan」の高い品質と、地域に根差した知恵と技術の結晶は、Sigmaの本質そのものです。